

◆在宅医療政策事始め・それは、1冊の本から始まった◆

『「物語・介護保険～いのちの尊厳のための70のドラマ」(岩波書店)」 第59話より

在宅医療のパイオニア佐藤智(あきら)さんと、後に厚生労働事務次官として、在宅医療を核にした医療改革に踏み切る決断をすることになる辻哲夫さんが出会い、深い信頼で結ばれることになったのは1987年のことでした。

老人福祉課の企画官に配属され、初めての分野の勉強のため書店めぐりをしていたときに手にとったのが、佐藤さんの著書『在宅老人に学ぶ』(ミネルヴァ書房)でした。

「深く感銘を受けました。門を叩こうと思っていました」



佐藤さんは回想します。

「ある講演会でのことです。壇上の辻さんが私の本を掲げて、『目を開いてくれたのはこの本です』と、本の内容を掘り下げた素晴らしい話をされました。

休憩時間に名乗り出たら大層驚かれ、『在宅医療の現場をぜひ体験させてください』と。意気投合しました」

訪問看護の草分け、紅林みつ子さんと行動をとともにした辻さんは、そのワザに感動しました。

「同志を増やそう」と、医師、ナース、ホームヘルパーと厚生省のスタッフが一緒に学ぶ勉強会を毎月開くことにしました。厚生省のスタッフが分野を超え現場の人々と一緒に学ぶという方式は、霞ヶ関では前代未聞のこと。(略)

ときは流れて99年、保険局長の近藤純五郎さんのところに厚生科学課長の高原亮治さんから思いがけない話が持ち込まれました。子どものいない富豪の夫妻が、「持ち株100万株を社会の役にたててほしい」と望んでいるというのです。

その少し前、近藤さんのもとに参院議員の阿部正俊さんから相談が持ち込まれていました。「[社会保障制度審議会の隅谷三喜男会長](#)が信頼している佐藤智というお医者さんが、新しい試みのための資金不足で困っているんだけど、助けてくれる金持ちはいないかなあ」

飛び上がるほど喜んだのは医療保険と健康政策を担当する審議官になっていた辻さんです。

あとはトントン拍子。100万株の配当金を原資とする「[勇美記念財団](#)」が2000年7月立ち上がりました。(略)

在宅医療を志す医師たちの研究会や学会は、各地で産声をあげていました。目指す目標は重なっているのに、その活動はバラバラで互いの成果を交換する機会がないままに、時間が過ぎていました。

そんなとき、財団が誕生。ここを拠点に次第に人の輪がつながるようになりました。事務次官になった辻さんの肝入りで、国立長寿医療センター総長の[大島伸一さん](#)が招集する「在宅医療推進会議」が誕生。医師だけでなく、歯科医師、薬剤師、看護師の組織も加わりました。

07年11月23日、長寿医療センターも共催して開いた在宅医療推進フォーラムでは、表の7つの団体が集まりました。

2007年の共同声明に加わった在宅医療推進7団体とその前身			
日本プライマリ・ケア学会	1978	実地医家のための会	1963
全国国保医学会	1963	全国国保医学会	1961
日本ホスピス・在宅ケア研究会	1992		
日本在宅医学会	1999	在宅医療を推進する医師の会	1994
日本在宅医療研究会	1999	在宅癌治療研究会	1990
在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク	2002	在宅ケアを支える診療所・全国ネットワーク	1995
日本家庭医学医療学会	2002	家庭療学研究会	1986

在宅医療推進のための共同声明

2007年11月23日

- ① 市民とともに、地域に根ざしたコミュニティケアを実践する。
- ② 医療の原点を見据え、本来あるべき生活と人間の尊厳を大切にした医療を目指す。
- ③ 医療・福祉・介護専門職の協力と連携によるチームケアを追求する。
- ④ 病院から在宅へ、切れ目のない医療提供体制を構築する。
- ⑤ 療養者や家族の人生により添うことのできるスキルとマインドをもった、在宅医の養成を積極的に支援する。
- ⑥ 日本に在宅医療を普及させるために協力する。
- ⑦ 毎年11月23日を「在宅医療の日」とし、在宅医療をさらに推進するためのフォーラムを開催する。